

# 第70回翠巒祭を終えて ～伝統の継承～

6月4日、5日に本校の文化祭である翠巒祭が開催された。新型コロナウイルス感染症の影響により3年ぶりに有観客での実施となった。コロナ禍という逆境の中、見事に第70回翠巒祭を成功へと導いた実行委員長の砂盆諒くん(3の7)に話を聞いた。



第70回翠巒祭実行委員長の砂盆諒くん

「翠巒祭を終えての感想」  
3年ぶりの有観客開催を無事に終えられて充実感を感じている。翠巒祭を通じて、「高生生のエネルギー」というものを自分自身も改めて実感した。運営の中心となったチーフ陣はもちろんだが、それ以外の実行委員、一般生も一人一人が輝いていたと思う。炎天下にも関わらず入場口ですつと受付をしてくれた生徒もいれば、華やかな音響の裏で黙々とパフォーマンスの練習に励む生徒もいた。このように、それぞれの生徒が自分の役割を全力で全うする姿を見られることも、翠巒祭を実施する意義だと感じた。

「今年の翠巒祭からの新たな試み」  
コロナ禍の開催ということ、特別衛生管理班を創設して感染症対策にあたってもらった。また、副実行委員長の桑原徹成くん(3の1)と体育館行事班の尽力のお陰でeスポーツ企画の実施に至った。更に、会計課チーフの矢野凌一朗くん(3の1)と生徒会長の小菅慈人くん(3の1)による有志コンビGunma The Hackerにも様々な企画(チケット制の実施など)でお世話になった。

「来年の翠巒祭に向けて」  
いような知識が「肥やし」となっていて、人間形成に大きく関わってくることが少なからずある。便利で即時的な知識ではなくとも、無駄ではない。大学や社会に出てから、まったく触れてこなかった分野に新しく触れる際には、これらの知識が杖となってくれるかもしれない。むしろ学際的な研究や転職が当たり前となった現代にこそ、「学校で学ぶ知識」には需要があると考えられる。

「三角関数よりも金融経済を学ぶべきではないか」。少し前にツイッター上で話題となった主張だ。現役の衆議院議員の発言だったこともあり、すぐさま拡散され、賛否を巻き起こした。

日本の学校教育は俗に「詰め込み教育」とも呼ばれるように、とにかく大量の基礎知識を教え込むことで有名だ。それも、数学の公式や古典の文法、歴史の用語などの、生活を送る上で役に立つとは思えないような知識だ。技術家庭科などの日常生活に必要な知識は副教科として扱われ、主要教科に対し比重は小さい。

## 論説 学校で学ぶ 基礎知識の意義

表れだろう。このような主張は昔から数多く存在する。こうした主張に対し、太宰治は『正義と微笑』の中でこう語る。「一見何にも活かすことのできな

略) 日常の生活に直接役に立たないような勉強こそ、将来、君たちの人格を完成させるのだ」。

「学校で学ぶ知識」には需要がある。どのみち、大学受験のためには、学校の勉強は避けては通れない。将来的に活用できることを期待して、前向きに取り組んでみてはどうだろうか。(宮前)

## 漢組 全国への想い



演奏を終えた3年生

8月2日から8月4日に練馬区立練馬文化センターで和太鼓の全国大会が行なわれ、高高は8月4日に演奏した。今回の大会への意気込みを部長の須永健介くん(3の5)に聞いたところ、「出場するメンバーは全員3年生なので、受験勉強と両立するため、短い練習を集中して行なっている。また、多くの人からアドバイスを貰い、自分たちの課題をひとつずつ改善してきた。勝負曲である蒼天は、作曲や振り付けを自分たちで行なった個性の詰まった曲なので、どこにも負けない自信がある」と力強く語った。(樋口)

## 高生生の通過儀礼 赤城合宿を振り返って

高高では例年4月に、「国立赤城青少年交流の家」で、1年生全員を対象とした合宿オリエンテーションが行なわれる。今年も4月21日から24日までの2泊3日で行なわれた。

1日目は、先生方より各教科の学習と高校生活における留意点や、SSH(スーパーサイエンスハイスクール)の概要についての説明があり、2・3年生からは学校行事の紹介があった。

2日目は、9時から合宿所の近くにある鍋割山の登山が実施された。15時には下山し、その後は翠巒祭のクラス企画を検討した。夜には応援部から校歌と翠巒(応援歌)の指導があった。

3日目は、高高卒業生と知り合いがいないため、ずっと敬語で話していたが、寝食を共にする中で砕けた会話が出来るようになった。今、自分がクラスに溶け込み、楽しく過ごしているのは間違いないと振り返った。(新井)



鍋割山を登る1年生

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---